

プログラム program

◆ 11月19日（土）13:00～16:00

総合司会 柴田優子

和洋女子大学准教授・家庭科教育研究所研究員

開催挨拶

金丸裕志（和洋女子大学総合研究機構代表）

代表挨拶

岸田宏司（和洋女子大学学長）

設立説明

佐藤宏子（和洋女子大学家庭科教育研究所 特別研究員）

祝 辞

堀内かおる氏（日本家庭科教育学会会長）

シンポジウム・パネルディスカッション

閉会 大石恭子 和洋女子大学教授・家庭科教育研究所研究員

《 祝辞 》

家庭科教育研究所設立への期待

堀内 かおる

日本家庭科教育学会会長・横浜国立大学教授

1. 家庭科教育の歴史を振り返って

戦後、家庭科は新たに「民主的家庭建設のための教科」として誕生し、学習内容では家族関係を中心とすることとされた。しかし、高度経済成長を遂げつつある社会の要請や性別役割分業に基づく近代家族をモデルとする家族政策を背景として、中等教育における女子のみ必修の教科となり、教育におけるジェンダー再生産に加担することになった。

その後の国際的な男女平等を指向する流れの中で、1989年の学習指導要領改訂によって中学校技術・家庭科における男女共通履修領域の設定および高等学校家庭科の男女必修履修化により、家庭科は小学校第5学年から高等学校まですべての児童生徒が必修で学ぶ教科となった。こうして、家庭科教育における制度上の男女平等は達成された。

それから30年余りが過ぎた現在、家庭科は男女ともに当たり前で学ぶ教科として、教育課程に位置づいている。少ない授業時数、非常勤や免許外で担当する教員の多さ、各校一人配置といった困難な状況にある家庭科教師たちに必要なのは、互いに集い学び合い、家庭科教師としての「やりがい」を感じて自分自身をアップデートできる「場」なのである。

2. 日本家庭科教育学会における取組と課題

日本家庭科教育学会は、「生活の質向上に資する家庭科の研究と実践の発展に寄与する学会」として、1958年6月に設立された学術団体である。本学会の歩みは、家庭科という教科が公教育の中に位置づき、変容してきた歴史と共にある。家庭科は現在進行形で推移する教科である。不易と流行を意識しつつ、これからの未来を担う子どもたちにとって、「いま学んでおくべきこ

と」とはどのようなことなのか、家庭科教師はどのようにして、よりよい授業を提案していけるのか、研究を通して明らかにしていくことが課題である。

3. 家庭科教育研究所への期待

和洋女子大学家庭科教育研究所の設立に際し、心からお祝いを申し上げます。本研究所がこれからの家庭科教師たちにとっての心の支えとなることを期待したい。全国で孤軍奮闘している家庭科教師たちが授業で悩んだとき、新しいチャレンジをしたくて教材を探しているとき、家庭科教育研究所のウェブページにアクセスしてみよう、と思いつくような家庭科教育の実践のための宝庫、魅力的な集いの場となっていくことを、心から祈念している。そして、私もその教師たちの一員として、今後もかかわらせていただくことができれば幸甚である。家庭科教育研究所の開設、誠におめでとうございます。

〈 講演者のご紹介 〉



堀内 かおる (ほりうち かおる)氏

日本家庭科教育学会会長・横浜国立大学教授

専門は家庭科教育学、ジェンダーと教育

主な著書や業績：堀内かおる編著『生活をデザインする家庭科教育』(2020 世界思想社)、堀内かおる著

『家庭科教育を学ぶ人のために』(2013 世界思想

社)、堀内かおる・南野忠晴『人生の答えは家庭科に

聞け!』(2016 岩波書店)、堀内かおる著『教科と教師のジェンダー文化—家庭科を学ぶ・教える女と男の現在』(2001 ドメス出版)ほか。家庭科教師の力量形成・授業創発力向上に向けた研修組織である HELCY(Home

Economics Lesson/Learning Community in Yokohama)を主宰し、毎月1回のオンライン研修を通して学び続けたい家庭科教師を支援している。

2012年「ジェンダー視点に基づく家庭科教育の理論と実践に関する研究」で日本家庭科教育学会賞受賞

《 公開シンポジウム 》

日時

2022年11月19日（土）13:30～16:00

テーマ

「新しい時代へ 私たちの未来へ 家庭科でやれることはたくさんある」

趣旨

地球規模の持続可能性、自然災害、コロナ禍への対応等々、私たちは大きな社会的課題に直面しています。今こそ、私たち一人ひとりが主体的に新たな時代に立ち向かい、生き方を考え、「よりよい生活」を創るための知識やスキルを獲得することが必要で、そこに家庭科の重要な役割があります。

そこで、本シンポジウムでは、各界で活躍する方々にそれぞれの専門の視点から、今の時代を読み解き、「家庭科教育（人間のウェルビーイングの立場から物事を見て、より良い生活・社会実現のために行動できる子どもたちを育てる）」への期待を述べていただきます。

コーディネーター：工藤由貴子（家庭科教育研究所特別研究員）

第一部 13:30～14:50

【講演 1】

人生 100 年時代の持続可能なコミュニティ 研究者からの期待

袖井孝子氏

一般社団法人コミュニティネットワーク協会会長

【講演 2】

より良い暮らしを求めて 企業からの期待

三神彩子氏

東京ガス株式会社 都市生活研究所 所長

【講演 3】

持続可能でエシカルな社会を創るために 私たちにできること

末吉里花氏

一般社団法人エシカル協会代表理事 日本ユネスコ国内委員会広報大使

◆◆ 14:50～15:00 休憩 ◆◆



第二部

パネルディスカッション 15:00～16:00

袖井孝子氏

三神彩子氏

末吉里花氏

堀内かおる氏（日本家庭科教育学会会長）

久保桂子（和洋女子大学特任教授・家庭科教育研究所研究員）

【講演 1】

人生 100 年時代の持続可能なコミュニティ －研究者からの期待－

袖井 孝子

一般社団法人コミュニティネットワーク協会会長

1. 人生 100 年時代がやってきた！

今年(2022 年)、100 歳以上人口が 9 万人を超え、人生 100 年時代が現実のものとなってきた。しかし、私たちのライフコース・モデルや社会システムは人生 70 年時代で停止している。

2. 人生 70 年時代（1970 年代、高度経済成長）と超高齢社会（2060 年頃、低成長）

- ・ピラミッド型の人口構成を前提とした核家族が多数を占める画一的なライフコース
- ・のし烏賊型の人口構成を前提とした多様な家族・多様なライフコース

3. 人口の高齢化と都市集中によるコミュニティの崩壊と消滅

- ・日本創生会議：出産可能年齢の女性が減少する自治体は消滅する。
- ・高齢化による東京圏の介護難民の増加 → 高齢者の地方移住の勧め
- ・実際には高齢者よりも若者の地方移住が増える傾向

4. 生涯活躍のまち：人生 100 年時代を見据えた持続可能なコミュニティ

- ・ゆいま～る那須
- ・那須まちづくり広場

5. 家庭科教育への期待

- ・家族と住まいの関係：生活・福祉の基盤としての住まい。
- ・多世代、多民族、多文化共生のコミュニティを創出するには

〈 講演者のご紹介 〉



袖井 孝子 (そでい たかこ)氏

(一社) コミュニティネットワーク協会会長、お茶の水女子大学名誉教授、東京家政学院大学特別招聘教授、(一社) シニア社会学会会長、NPO 法人高齢社会をよくする女性の会副理事長。

専門は老年学、家族社会学、女性学。

主な著書や業績：『日本の住まい 変わる家族』(2002、ミネルヴァ書房)、『変わる家族 変わらない絆』(2003、ミネルヴァ書房)、『女の活路 男の末路』(2008、中央法規)、『「地方創生」へのまちづくり ひとづくり』(共著、2016、ミネルヴァ書房) 他多数。

【講演 2】

よりよい暮らしを求めて — 企業からの期待 —

三神 彩子

東京ガス株式会社 都市生活研究所 所長

1. よりよい暮らしに向けた東京ガスの取り組み

東京ガスは 1885 年、「日本資本主義の父」渋沢栄一によって創立された。横浜で最初のガス灯がともされてから、エネルギーを使った私たちの暮らしは大きく様変わりしてきた。台所を例にとれば、煙やすすが出るのが当たり前だった生活が一変した。次の大きな転換点は 1969 年の天然ガスの輸入。17 年間で延べ 750 万人の社員がお客様先での熱量変更に取り組み、今のような便利な暮らしの実現に取り組んだ。1983 年には、地震時にガスを遮断する「マイコンメーター」の設置、2009 年には世界初の家庭用燃料電池「エネファーム」の普及、2016 年電力小売り全面自由化に伴い、電力の販売も開始するなど、東京ガスの歴史は、よりよい暮らしに向けたチャレンジの連続であった。

しかしここに来て、エネルギーを使った暮らしは大きな変化に立ち向かわざる得ない状況となっている。それが、地球温暖化に伴う気候変動問題である。日本政府は温室効果ガスの排出を 2050 年までに実質ゼロにするという大きな目標を掲げている。東京ガスは、エネルギー企業としていち早く CO2 ネット・ゼロに向けた取り組みを推進している。また、都市生活研究所では、生活者によりそった提案を行うべく、生活者の意識や行動に関する研究調査を継続して行い、持続可能な暮らしに向けた提案や情報発信を行っている。

2. より良い暮らしに向けた家庭科教育への期待

家庭科教育も時代とともに変遷し、現在では、「消費と環境」分野をはじめ、環境と暮らしをつなげて考え、取り組むことが求められている。温室効果ガス削減に向けて、国は脱炭素型ライフスタイルを推進しているが、こういった暮らし方を社会規範として定着していくことが肝要であり、特に学校教育等での次世代への取り組みへの期待は大きい。

東京ガスでは 2017 年度より 4 年間、環境省の実証事業に協力し、全国で約 1 万名の児童・生徒・学生に「省エネ教育」を行った。その結果、学校での教育により、家庭からの二酸化炭素排出量を 5.1%削減できることが明らかとなった。

よりよい暮らしとは、生涯にわたり、健康で、心豊かな、充実した生活を送ることであり、そのためにも快適で安全、健康や地球環境に配慮した生活とそれを支える地域社会を目指す必要があると考える。企業は企業の立場で、個人は個人の立場で、そして、教育がそれを支え、次世代が安心して暮らせる持続可能な社会となることを切に願っている。これまで経験してこなかったこの変化の大きい時代に、家庭科教育が、私たちの暮らし方を支える一つの指針となることを期待している。

〈 講演者のご紹介 〉



三神 彩子 (みかみ あやこ)氏

東京ガス株式会社 都市生活研究所 所長
博士 (学術) / 東京家政大学非常勤講師
キッズデザイン協議会理事 / 日本調理科学会理事

専門は、環境・エネルギー、食生活、住生活、環境教育、行動変容、エコ・クッキング等。

主な著書や業績：『食生活からはじめる省エネ&エコライフ』(2016 建帛社)、『調理を学ぶ』(2021 八千代出版)、『今日からはじめる省エネ教育』(2021 開隆堂)、『省エネ行動スタート BOOK』(2018 開隆堂)、小学生の自由研究シリーズ『地球からのSOS エコで応答せよ!』(2008 近代映画社)などの著書や『エコな住まい方すごろく』(2019 開隆堂)、『エコな買い物&調理カード』(2018 開隆堂)などのゲーム開発多数。

【講演3】

持続可能でエシカルな社会を創るために — 私たちにできること —

末吉 里花

一般社団法人エシカル協会代表・日本ユネスコ国内委員会広報大使

今、世界の緊急課題である、気候変動、人権、貧困、生物多様性の4つの課題を同時に解決していくために、「エシカル」という概念が有効だと言われています。私たちの暮らしと世界との繋がりを包括的な視点で考え、消費行動という実践を通じて、その学びを生きたものに変えていくことができるのがエシカル消費です。エシカル消費を生活の中で実践すれば、SDG'sの17の目標のうち、12番目の「つくる責任 つかう責任」という目標を達成するための大きな一歩を踏み出すことができます。

この講演では、エシカル消費の基礎知識や世界・日本で起きている最新動向を学ぶだけでなく、参加者が一生活者として何ができるのかを共に学んでいきます。また、エシカル協会が行ったエシカル消費動向調査の分析結果を紐解きながら、エシカル消費普及における生活者や企業、行政の役割についても共に考えていきます。

〈 講演者のご紹介 〉



末吉 里花 (すえよし りか)氏

一般社団法人エシカル協会代表・日本ユネスコ国内委員会広報大使

専門は、エシカル消費

主な著書や業績：「はじめてのエシカル」(2016 年山川出版)、「じゅんぴはいいかい？～名もなきござるとエシカルな冒険～」(2019 年山川出版)、「エシカル革命～新しい幸せのものさしをたずさえて～」

(2021 年 山川出版社)、中学国語 1 年 (教育出版) ではエシカル消費をテーマに執筆。中学社会公民 (教育出版)、中学家庭科 (東京書籍)、高校家庭基礎 (開隆堂) などにエシカル消費やキャリアに関するコラムを執筆。2015 年「エシカル協会」を設立、エシカルな暮らし方が幸せのものさしとなる持続可能な社会の実現を目指して、講座や講演、政策提言などを通じて、エシカルの考え方やエシカル消費の普及啓発に取り組んでいる。東京都消費生活対策審議会委員、環境省中央環境審議会循環型社会部会委員、日本エシカル推進協議会理事、日本サステナブル・ラベル協会理事など数多くの政府政策検討委員や企業や自治体などのアドバイザーを務める。